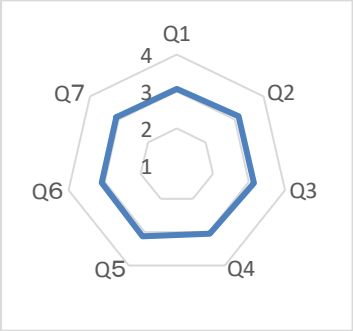
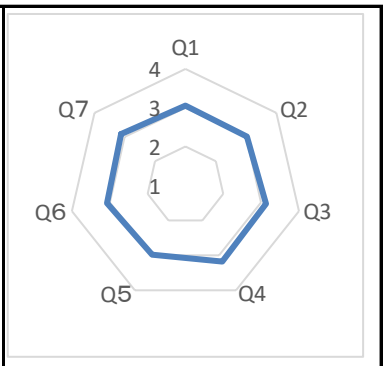
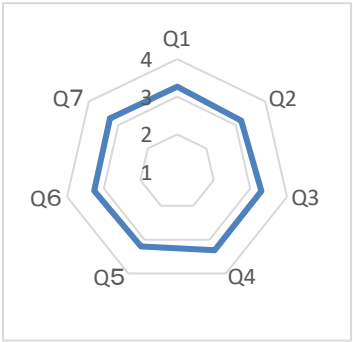
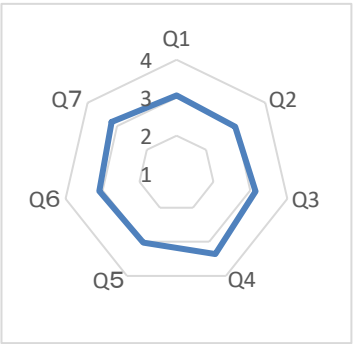
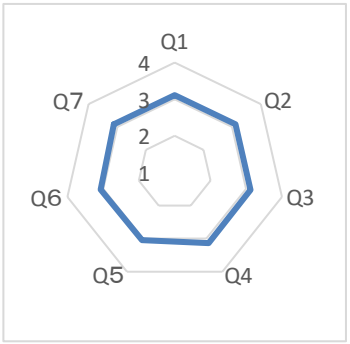
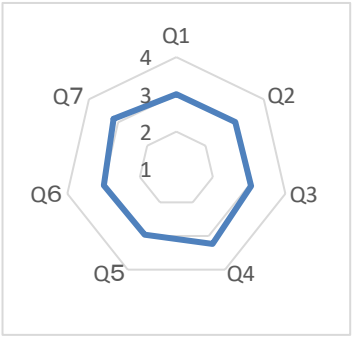
令和6年度第1回 生徒による授業評価　教科ごとの分析結果

生徒による授業評価（第1回）を、6月21日～7月19日の間に実施しました。
次の質問について、かなり当てはまる（4点）、ほぼ当てはまる（3点）、あまり当てはまらない（2点）、ほとんど当てはまらない（1点）として点数化し、平均をグラフとして表示しています。（4点満点）

【質問項目】
Q1:毎時間の授業や単元（内容のまとまり）のはじめに学習のねらいを示したり、毎時間の授業や単元の学習のあとに学習したことを振り返ったりする機会がある.
Q2:単元（内容のまとまり）の学習の中で、他者の考えを知り、自らの考えを広げ深める機会がある.
Q3:単元（内容のまとまり）の学習の中で、課題について自分の考えをまとめたり、解決方法について考える場面がある
Q4:授業の中で身に付いたことや、できるようになったことを実感することができた
Q5:他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた
Q6:授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた
Q7:授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた

		結果の分析	これからの取組
国語		全体としては、どの項目についても、8割以上の生徒が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答し、授業に対する不満は感じられない。その一方で、「他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた」、「授業で得た知識をもとに、自分の考えをまとめたり、課題の解決方法を考えたりすることができた」、「授業で学んだことをそれまでに学んだことと関連付けて理解することができた」の三項目において自己評価の項目がやや低い生徒が見受けられ、発展的に学習していくことの困難な生徒へのより丁寧な対応をする必要がある。	深く理解し、発展的に学習していくことのできる生徒とそうした学習が困難な生徒の両極がいることを理解する。その上で、発展的学習のできる生徒をさらに伸ばし、うまく対応することの困難な生徒への別な手当の二方向の指導が必要となっていることを鑑み、課題の与え方や発問の仕方について工夫する。また、生徒同士で教えあい、発展させる手立てを考える。
地理歴史		生徒たちは全項目で8割以上が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答し、授業を好意的に受け止めている。 Q6・Q7についての自己評価は高いが、教員側からの視点では達成度は低いと考えられる。その結果、テストでは正答できるが、テスト終了後、一定期間経過後、同じような問題を出題しても解けない生徒が多く見られるため、学習の定着が図られていないと思われる。	思考力や考察力を深めさせる発問や課題に取り組ませて経験を積んでいくことが求められる。授業を一過性のものにせず、生徒に知識の定着だけでなく、得た知識からどのように思考力や考察力を養っていくかを意識させる授業を展開していく。
公民		全体としては、9割以上が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」を選んでいる。詳しく分析すると、Q2やQ5については相対的に高い割合になっており、生徒同士の考えを知る機会が多く実施できていると分析できる。政治経済の授業では、対話的な学びを促進する目的から、毎時間、GoogleFormによる意見の提出と共有を実施しており、このような取組が結果に影響を与えていると考えられる。一方で、Q4・Q6・Q7が相対的に低く、授業での学習が生徒自身の生活に実感を伴って効果を与えられているか、という点に課題があると考えられる。	今後もGoogleFormによる意見共有を実施し、対話的な学びを促進していくとともに、複数の担当者間での意思疎通を綿密に行い、授業の目的を常に意識しながら取り組んでいく。 また、生徒自身の考えや実生活とのつながりを整理・意識させるために、振り返りやまとめの時間をしっかりと設けていく。さらに、学習した内容を、単元のくぎりごとにまとめ、全体を通じて生徒自身の生活や単元同士の関連付けを意識できる時間を設定する。

数学		どの科目も生徒の取組は良好であると分析することができる。特にQ3・Q4・Q7は高い評価を得ることができた。一方で、他者の考えを知り、自らの考えを深める場面では生徒の実感を伴っていないため、Q2・Q6では改善をすることが必要である。	数学的活動に重点を置き、思考を深めさせる問題を扱うことで、生徒の考えを深めていきたい。またその際に、他者の考えをもとに、思考を深める手立てを取るようにしていく。研究授業では、深い学びを視点として、どう自分の考えを深めるかということに焦点を当てていきたい。
理科		いずれの項目も「かなり当てはまる」または「ほぼ当てはまる」が8割を超えており、高い評価であった。特に前半3つの問いについてはほぼ9割が満足出きる回答であったが、後半4つの問いの満足度がやや低くなっている。授業ノートやポートフォリオによる学習活動、授業ごとの振り返りシートなどを活用した振り返り活動等により、生徒が授業ごとの理解を深めていっているが、各授業や単元の理解をつなげて理解することを意識した授業展開が必要であると考えられる。	学んだことを生徒自身のものとしたり、それを深めたり、他のものに関連付けられるようにするなど、より発展的内容が今後の課題である。振り返りシートの活用、問いかけや教材を工夫し、改善につなげたい。
保健体育		どの項目についても、8割以上の生徒が「かなり当てはまる」「ほぼ当てはまる」と回答している。しかし、「他者の考えを知ることにより、新たな考え方を知るなど、自らの考えを広げ深めることができた」という項目がやや低い。保健においては他者と話す機会や発言などを通じて他者の考えを聞くことがあるが、体育については学習ノートを用いて自分の考えをまとめることで振り返りを行うという点がこの結果に影響していると考えられる。	特に体育において、ペアやチームで活動する際に、活動内容の工夫や試合に向けた作戦を考える時間を設けるなど、生徒同士で意見を出し合いながら活動する時間を増やし、他者の考えをもとに、自らの考えを広げ深めることができるようにする。
芸術		Q4から、授業を通して約9割の生徒が「できるようになったことがある」と実感しており、生徒が粘り強く取り組んだ結果が表れている。また、Q5～7の回答は約8割が「当てはまる」と答えており、自ら考え課題解決に向けて学んでいる生徒が多くいると捉えることができる。しかし、芸術科目において実技に苦手意識を持っている生徒は一定数いるため、深い学びに至る仕組みづくりを行う必要がある。	生徒が粘り強く課題に取り組むことができるよう、単元の思考の過程がわかるワークシートや展開を工夫する。ワークシートに残すことによって、生徒自らの学習を可視化し課題意識を持って取り組むことが期待される。また、ワークシートの評価を行うことで、生徒へのことばがけや授業改善に活かしたい。
外国語		総じて全項目について、「4」「3」と回答した生徒が8割ほどで昨年までの傾向と似たような結果となった。英語が苦手と答える生徒が多い傾向がある中で、生徒が少しでも「達成感」を感じられるよう「わかりやすい授業」を心がけたり、指示を明確に出したり、事前に見通しを示した上で授業を行ったことが功を奏したと思われる。引き続き1年生は「基礎力」を身につけさせることに重点を置きつつ、学年が上がっていくにつれて、応用的な言語活動を増やしていけるような指導計画を心がけていきたい。	英語が苦手な生徒が多いため、「理解させる」ことで手一杯になっているのもまた事実であるが、指定校事業である「主体的で対話的な『深い学び』」を実現するための授業改善から、少しでも多くのヒントを得て、日々の授業内容に活かしていきたい。 また、教員が一方的に説明するだけでなく、生徒に教科書の内容について調べさせて、教員役をさせたり、ペアやグループでインタラクティブに意見交換させたりする時間を今まで以上に設けるなど、これまでのように「基礎」に重点を置きつつ、毎時間少しずつ「言語活動」をする時間を増やしていきたい。

家庭		どの項目においても、85%以上の生徒が「ほぼ当てはまる」を回答している。しかし、Q1やQ3では、他の質問と比較して、「あまり当てはまらない」や「ほとんど当てはまらない」と回答する生徒が多かった。家庭基礎では、授業で学んだことを実生活に取り入れることで、知識が身に付いたことやできるようになったことを実感できるのではないかと考えられる。	授業の内容を実生活に取り入れられるよう、具体的な例を挙げる。また、授業の最後や単元の最後に振り返りの時間を設けることで、新たに得た知識の定着を図る。 アンケートの自由記述では、「スライドの文字が小さい」という意見が数件あった。そのため、1枚のスライドに載せる情報量や内容を見直し、生徒が見やすく分かりやすい教材づくりに努める。
情報		どの項目も高い評価を得ることができた。特にQ4では情報機器の操作能力を日々高めることで、実感を伴っていることがわかる。Q5の他者の考えを知る場面を1学期では設定することが少なかったため、改善が必要である。	知識・技能を身に付けるとともに、身に付けた知識・技能を活用する場面設定を取り入れる。特に知識・技能の修得には個人差も大きいため、ペアワークを通して他者の考えを知る機会を増やしていきたい。研究授業においてもそうした機会を設けるとともに、深い学びについて研究をしていきたい。